

東北ありがとう!



Teen for 3.11

Edition **1**

東北
知事!

「また明日ね」

はもうこの教室には響かない。



この日、全てを一瞬にして奪われた人がいます。
日常も、思い出も、愛する人も。
途方も無い絶望と
どこまでも広がる瓦礫の山を突きつけられ、
東北が、日本が、大きな悲しみにつつまれました。

震災から一年半が経った今、
あなたはこの日の事を忘れてしまっていないですか。
いつも通りの毎日を当たり前だと思っていないですか。
すでに復興は終わった、
そう思っていないですか。

忘れないでください。
この日を。亡くなった人たちの命を。

東北の復興を担うのは、
未来を築くのは、
他でもない僕たち 10代です。

2011年3月11日14時46分

CONTENTS 東北さいこう!

TEEN FOR 3.11 1ST EDITION 2012

- P.07 > ROAD TO 気仙沼! —Teen for 3.11 FIRST TOUR—
- P.09 > 考えるチカラ —3.11のこれから—
- P.11 > FOR TOMORROW'S SMILE—ボランティア体験談—
- P.13 > MESSAGE: 未来をつくるのは君自身だ!
- P.17 > 未来 —震災について考えてみませんか?—
- P.19 > LET'S TAKE ACTION! —ボランティア情報—
- P.21 > これから行く、みなさんへ

これだけは伝えておきたい

- P.23 > Teen for 3.11 について



タイトル「東北さいこう！」に込めた思い

「東北さいこう！」と聞いたとき、多くの人がまず「東北最高！」という漢字を思い浮かべるのではないのでしょうか。

2011年3月11日をもって東北は多くのものを失いましたが、人々の愛と優しさだけは変わらずに残っています。

ボランティアとして訪れた赤の他人に対し、東北の方々は、「ありがとう」、「またきてね」と声をかけてくれます。そんな愛と優しさに溢れる東北は、文字通り「最高」の地です。

その東北を救うために、私たちにできることはなんでしょうか。

10代の私たちでもできること、それは東北についてもう一度真剣に考えること、つまり「再考」することです。

そして東北について「再考」することが、東北に光をもたらすこと、つまり「採光」へとつながることを私たちは期待しています。

「最高」の東北を「再考」し、「採光」する。
ひいてはそれが東北の「再興」へとつながって欲しい。
私たちはそんな願いを「東北さいこう！」というタイトルにこめました。

ぜひこの冊子を読んでたくさんのことを感じ、そして考えてください。

高橋弦

新宿にてリフレクション（反省会）を行いました！
旅行での経験や考えたことをより深めることができ、
非常に有意義な時間になりました。



8/19
REFLECTION!

@ 22:30

東京駅に到着！

非常に有意義な2日間となりました！



@20:00

帰りのバス車内は行きとは
打って変わって非常ににぎやかでした！



@14:00

出発前に参加者全員で記念撮影。

バスに乗り込んで

東京に向けて出発です！



@11:30

底上げ YOUNG、気仙沼出身の10代による
気仙沼ツアー！

現地の10代にしか分からないことや、
震災当初の話などを聞いて



@9:00

復興商店街のCadoccoにて
底上げ YOUNG、気仙沼出身の10代と
ワークショップを行いました！

8/12
DAY 2 START!!

早めの起床。
周囲を散策！

@5:30

ROAD TO 気仙沼！

—TEEN FOR 3.11 FIRST TOUR—



8/11
DAY 1 START!! 新宿センタービル前
集合

@6:30

参加者全42名バスに
乗り込み気仙沼へ出発！

@ 7:10

八月十一日〜十二日、夏
休みを利用する形で第一回
Teen for 3.11 東北旅行が実
施されました！
参加者は高校生四十二名。
途中渋滞などによる大幅な到
着の遅れはあったものの、事
故は無く、参加者全員が無事
に帰宅することができまし
た。それぞれが新たな発見や
問題意識を持ち帰ることがで
き、非常に有意義な二日間と
なりました！



@14:00

お盆の帰省ラッシュで

高速道路は大渋滞。

バスがなかなか進まない。

予定より5時間半遅れて
気仙沼市鹿折地区に到着。

写真は六十八共徳丸。

@ 18:40



@19:10

目的地の気仙沼南町に到着。

現地ではみなの祭が催されていました！



復興商店街やみなの祭を

しばらく散策しお風呂へ。

@21:30



夜ご飯を済ませ就寝準備。

写真は女子部屋の様子。

みんなリラックスモードです

@22:30

八月十九日、旅行参加者によるリフレクション（反省会）を新宿にて行い、ワークショップで出た問題や、旅行から帰ってきて日常の生活に戻り、考えたこと、またそこから見出した問題とその解決策を班ごとに話し合った。

旅行に行くことによって新たに手に入れた視点や経験等を豊富に盛り込んだ話し合いが活発に行われ、これからもっと長期的に考えていかなければいけない問題や、それに対する十代なりのアプローチが明確になった。

ここでは、その中から特に議論が活発に進んだ二つのトピックについて、問題とその解決策とをピックアップして紹介する。

REFLECTION!

AUGUST 19



TOPIC 1: 旅行から帰ってくると、変わらない日常

「震災の風化」

いざ旅行から帰ってくると、震災についてのニュースや話題、そもそも「震災」という言葉自体を耳にする機会が現地とは比べて極端に少なく、人々の中で震災の記憶の風化が進んでいることを実感させられた。

被災地の写真だけでは実際に現地を訪れた時の衝撃が伝わりにくいこと、震災から月日が経ったことで当時の記憶が薄れてしまい、普段の日常を当たり前と感じてしまうことが風化防止を考えるうえで非常に大きな問題である。



↓ 風化防止のために、

「いま、できること。」

風化防止のために、一番効果的であるのが現地を訪れること。写真や映像では分からない被災地の現状や独特の空気感を知ること、震災を記憶に焼き付けることができる。

また、時間や経済的な問題で被災地を訪れることの出来ない10代に対しても、被災者の方による震災当時の体験に関する講演会を関東で開催したり、修学旅行で被災地に行ったりするなど、震災の記憶の風化を防ぐためにできることがある。

TOPIC 2: メディア情報の偏りによる

「土地の知名度による支援の差」

私たちが被災地と言われてあげる場所は、いくつあるだろうか。多くの地域が被害にさらされた中で、私たちが知っている場所はほんの一握りでしかないのかもしれない。

その最も大きな原因が、メディアで取り上げられる土地の偏りである。メディアで取り上げられることで有名になった土地には、自然と人や支援が集まる。つまり知名度の高い土地ほど復興が進んでいき、それとは逆に知名度が低い土地は、復興が進まず、次第に取り残されていくのである。

このように知名度の差が支援の格差を生んでいるということが非常に大きな問題である。



↓ 土地の「ウリ」を作る

メディア情報の偏りを引き起こしてしまう原因として一番大きなものは、土地の持つ「ウリ」の違いである。

例えば、もともと観光地や商店街だったところは観光産業が復活したり、復興商店街が建ったりと復興の兆しが見えやすく、メディアも取り上げやすい。それに対してもともと住宅地や田畑だったところは、復旧が長期にわたるため、復興の兆しが見えにくく、メディアも取り上げにくい。

このように土地としての「ウリ」の差が支援の差を生んでいるので、各土地の話題性のある「ウリ」を探し、または作り出し、関東等で大々的に宣伝することが重要であると考えた。



考えるチカラ

— 3.11 のこれから —

WORK SHOP!
AUGUST 12

私たちが旅行を行う上で、最も重きを置いていたものの一つがワークショップ。

ワークショップは、旅行中に撮った写真から震災や復興に関する問題意識を見出し、その解決策を班別に話しあって全体で共有するという形式で行った。

被災地を訪れたからこそ芽生えた問題意識や、斬新な視点が多く上がり、とても有意義な時間となった。ここでは、ワークショップによって明確になった、復興を成すうえで今後考えていかなければならない問題をピックアップして紹介します！



第十八共徳丸

直接見てみてテレビでは伝わらない生々しさがとても強く伝わってきた。

今、これをモニュメントとして残すかという議論があるが、自分たちとしては震災の風化を防ぐためにも後世に残したい。しかし一部の地元の方は「船を目にする度に震災のことを思い出して辛いから、ここには無いほうがいい。」「下にいる方々の遺体を埋葬してあげたい。」などの思いを持っている。このような発想は私達にとって新しく、地元の方の話を聞いて、議論することに大きな意義を感じた。

元々、沿岸の清掃活動はボランティアの仕事だった。

それを現地の人がやるようになったというのは少なからず復興が進んできていることを意味している。しかし、復興は現地の人の力だけで成し遂げるものでもなければ、ボランティアの力だけで成し遂げられるものでもない。そのため、ボランティアの役割と現地の人の役割をどのように線引きするかが課題となっている。

復興に向けてボランティアの仕事を現地の人に引き継ぐことは必要不可欠であるが、どのような段階を踏んで引き継ぎを行なうのか、またそれをどのように決めていくのかということを考えなくてはならない。

沿岸の清掃活動



FOR TOMORROW'S SMILE



「全世界のみなさんありがとう」

—南三陸町

ボランティア体験談

「東北さいこう！」第1号のボランティア体験談は
高校3年生の鈴木彩菜さんにお話を聞きました！
母の反対を押し切って参加した初めてのボランティア。

しかし、南三陸町での2日間は
決して楽しい事ばかりではなかった。

様々なことに気づかされ、
一回り大きく成長した彼女の体験談です！

初めてのボランティア —ぶち当たる母という壁

私は今年の春に宮城県南三陸町にボランティアをしに行きました。それまでも被災地の力になりたいとは思っていたものの、なかなか踏み出せなかったのは、ほとんどのボランティアの募集に年齢制限があったからです。今回は友人がある団体に直接連絡を取ってくれ、なんと一八歳以下の私たちも

保護者の同意書があれば参加することができました。しかし、私の母は私がボランティアに行くということになかなか賛成してくれませんでした。理由の一つ目は、その団体が本当に信頼できるのかわからないこと。二つ目は、被災地が今のような状況で、危ないかどうか分からないことでした。一つ目の問題の解決策として、その団体のホームページを見ました。しかし、宿泊施設、作業内容など未定なことがとても多かったため、メールで問い合わせ、初めて信頼できる団体だと確認できました。二つ目については私も少し不安に思っていたことでしたが、結局解決することはできないまま、なんとか母に同意してもらって参加することにになりました。

どこまでも続く「無」 —進まない復興

今回私が参加したのは一泊三日のボランティアバス。一斉休暇ではなく、ないものです。しかし被災した場所全てが同じ問題を抱えているのだと思うと、その膨大な広さに気が遠くなりました。自分が復興に協力できたことはその面積の内のほんのわずかです。けれどそれがどんなに小さくとも、達成感はずごく感じました。

続けることの大切さ —私のこれから

私がこの経験を通して感じたことは、今必要とされていることが何なのかを見極める事の大切さと、少しでも大きなことに協力できるようにするために活動を続けていく必要があるということです。また、高校生という時期にボランティアをしに行ったからこそ学べたことも多いと思います。一回で終わらせず、これが「体験」ではなく、「ボランティア」となるように協力し続けたいと思いました。

神奈川県在住 高校3年生 鈴木彩菜

普通の週末でした。二日目の朝、少し被災地の現状を見て廻りました。その時、あまりの光景に私は一瞬何が起こったのか分からず、ただ茫然とその場に立ち尽くしてしまいました。どこまでも続く「無」。大きな瓦礫のほとんどは撤去されたように見えたものの、建物の再建などはまだ始まっていませんでした。ただ残されたのは、昔は家だっただろうと思われるポロポロのコンクリートの土台のみ。ところが奥に進むと、瓦礫は実は撤去されたのではなく、数力所に山積みされていました。ただだということが分かりました。もちろん、あそこまで片付いたものも多くの方々の努力によるものです。でも正直に言うと、私はもう少し復興が進んでいるものだと思います。

「させていだいた」

—「私」が手伝う意味

被災地の様子を見て回ったあとは、最初の作業現場に行き、めかぶを収穫する手伝いをさせていただきました。



～MESSAGE～

未来を作るのは君自身だ!

インタビュー ——関東から東北へ

3月11日、東北で被災した人はその瞬間何を考え、どのように感じたのか。今回は南三陸町出身の大学生で、「底上げYOUNG」の代表理事をされている佐藤慶治さんにお話を伺いました。「底上げYOUNG」は大学生による、気仙沼を中心に活動している団体です。団体のこと、佐藤さん自身の3月11日の体験、そして将来の被災地や若者に期待することを尋ねました。

若者の意識を 底上げしたい

——「底上げYOUNG」さんの目標は何ですか？

「若者の意識を底上げすること」です。今の若者は「夢がない」とか、「とりあえず大学に行く」などと言って、目先の目標すらない生活を過ごしている人が多いかと思えます。でも目標や夢がある人は毎日を一生懸命、大切に過ごしています。僕はもっとたくさんの方々にそうやって欲しいと考えました。またイキイキとした若者が増えることは、ひいては社会全体にとって良い刺激になるだろう、とも考えています。

——活動を始められたきっかけは？

今まで僕は色々な団体の活動に参加してきて、そこで貴重な経験を積んだり、たくさんの人と出会ったりしてきました。だから今度は自分も企画する側に回り、より多くの人にそのような体験をしてほしいと思ったのです。つまり「自分たちが中心になって活動したい！」という気持ちがあっただけです。

——現在何を中心に活動
されているのですか？

今は震災への復興支援の中に参加者同士の交流を織り交ぜた活動をしています。でもそれはあくまで現在のニーズに対応してのこと。これから違う活動が中心になることもありえます。

——中心にあるのは常に「若者同士の
交流」なのですか？

はい。ただ、参加対象は若者だけではなくありません。今後年上の方々との交流も企画していくつもりです。

生きるってこの 大切なこと

——では、「若者の意識の底上げ」がコンセプトの「底上げYOUNG」さんが復興支援に参加したのはなぜですか？

被災地が今後復興をして繁栄するようになるまでに、最も長く中心的に活動するのは今の若者世代であるから、というのが理由の一つです。でも一番は、若者に被災地を訪ねることで、**今まで自分が当たり前だと思って過ごしてきた日常を振り返ってほしい**と考えたから。**生きることの大切さを噛みしめてほしい**です。

——それが意識の底上げにつながる、という狙いもあるのですか？

もちろん。被災地を訪れて何も感じない人はおそらくいないでしょう。若者に少なからず影響を与えられるだろうと考えています。

地震の口

——ここから答えづらい質問になるかと思いますが、すみません。

佐藤さんは三月十一日の地震が起きた瞬間どちらにいたのですか？

僕は宮城県南三陸町の戸倉という地区の「海洋青年自然の家」というところにいました。

——まさききどんなことを
考えましたか？

何も考えられませんでした。何が起きてくるのか、家族がどこにいるのか、これからどうなってしまうのか。大雪が降る中、**頭の中も真っ白**になりました。



——そのあとは避難をされたのですよね？

地震が起こったときにいた場所で五日ほど過ごし、さらに別の場所で一泊してから母校へ戻りました。その際に初めて街を見たのですが、なにも言えず、「へ？」と笑ってしまいました。

沿岸部は水が出たり入ったりしていて、中心部は瓦礫と半壊した建物でぐちゃぐちゃになっているような状況です。

まるで悪い夢でも見ているかのような気分でした。



——身近な方々とはすぐに連絡がつか
ましたか？

連絡が取れたのは震災から四日後の
夜でした。従兄から家族の無事を知ら
され、やっと安心出来て泣き崩れたの
を覚えています。

——連絡が取れない四日間は不安でし
たね。

不安なんて言葉では言い表せません。
でもそばにいた同級生や先生もそれは一
緒でしたから。口に出してはいけないと
全員が思っていました。

それに、避難してきたたくさんの人た
ちを前に避難所スタッフとして働いてい
たのでそんなことを考えている暇もなかつた
です。

——避難所はどのような状況でしたか？

僕がいた避難所は町内で最大だったの
で、大勢の人との生活はすごくストレスで
した。プライバシーがまるでなかった。

もっと話したい！

こういうような話、僕はもっと広めたい
と考えているんです。少しでも多くの人に
知ってほしい。

——被災地には、将来的にどのような姿
になってほしいですか？

震災以前よりも活気の溢れる町になって
ほしい。それぞれの土地の特産品を売った
り観光地にしたたりするなどして街興しを
したいです。

それで、街中が笑顔で満たされている
ような場所にするのが理想ですね。



「底上げ YOUNG」

NPO 法人「底上げ」の参加メンバーのうち、
大学生 4 人が集まり結成。気仙沼市を拠点
に 4 月から活動している。

<http://ameblo.jp/sokoage-young/entry-11275025618.html>

第 1 回 Teen for 3.11 東北旅行で気仙沼
のガイドをしてくださいました。



笠原千秋

——それでは最後に、今の若い世代に一
言呼びかけて下さい！

夢を見つけてよう！
目標に向かって突き進もう！
未来を作るのは、君自身だ！！

——ありがとうございます！

若者に

伝えたい

——正直なところ、聞く側としては辛い
体験を思い出させてしまうようで、心苦
しい気分になってしまうのですが。

辛いけれど、これ乗り越えないと前へ進
めないんです。「震災」という一つのモノ
を「辛い」「悲しい」という面からばかり
見ていたらダメで、「震災」から生まれ
た「出会い」や「経験」、「チャンス」
も同じくらいある、ということに気づく
べきなんです。マイナスをプラスに変える
力です！

——とても力強いお言葉で、なんだか私
の方が力をかけてもらった気がします。

——ご自身も被災されたという佐藤さん
が、社会全体を見据えた復興支援活動
をされていると伺い、とても強いエネルギー
を持つ方だと思っていました。それは「震
災」を「出会い」や「経験」のチャンス
という側面からも捉えられているからなの
ですね。

そうですね。僕も最初のころは何も考
えられませんでした。だけど避難所でス
タッフとして働く内に「自分らしさ」を
取り戻すことができました。
「辛いときこそ笑顔！」をモットーに
掲げて動くことができたのが全ての始ま
りと言っても過言ではありませんね。
震災を通じた数々の出会いや経験が自
分を助けてくれて、また一緒に頑張る仲
間と出会えて、今日まで自分を支えてく
れました。



未来

震災について考えてみませんか？

- 2011年3月11日、東日本を襲った未曾有の大震災。

その震災から1年半がたった今も、
現地では復興に向けて多くの人々が活動している。
2011年12月をもって、自衛隊は被災地から撤退し、
復興に向けた新たな歩みの核を担う存在として
ボランティアの存在が今までより一層注目されている。
被災地では今、人々の「心」、そして「手」が求められているのだ。

このような状況の中で、私たち10代になにができるだろうか。

私たちには何ができる？

十代にできる事といったら限られてしまおうし、些細な問題でさえ私たちがの力で解決することは難しいかもしれない。だからといって「自分には関係ないから」「誰かがどうにかしてくれるから」とあきらめてしまっていないだろうか。

「十代の自分が行動してもなにも変わらないだろう」、「十代だからなにもできなくてもしょうがない」。それは十代であることを言い訳にした逃げにすぎないのではないか。

このまま十代が震災に背を向け続けたら東北の復興への道は、未来は、誰によって築かれるのだろうか。

考えること

—十代としての向き合い方—

二十一世紀を担う世代として、震災と向き合うことは私たち十代にとって避けられない道だ。そこで私たちTeen for 3.11は、十代という立場から震災にどう向き合うかというのを皆さんに提案したい。私たちの提案する十代としての震災との向き合い方、それは

「震災について考えること」

である。一日ほんの五分でも、十分でも、電車を待っている一、二分の間でもいい。被災地について考えることを提案したい。



ストップ風化

「考えるだけではなにも変わらないのでは？」と思うかもしれない。しかし被災地について考えることは、私たちの中で、今回の震災の記憶が風化してしまふことを防ぐというとても大きく大きな意味を持つ。私たちが社会を引っ張っていく世代となる時まで、今回の震災の記憶を、痛みを、風化させずにとっておきたい。

そこで、Teen for 3.11では、私たちにごく身近でありながらも、解決が難しい問題について、十代のみんなで考えていくことを提案したい。答えの見えない問題について考えることが、いつか実を結ぶ日がくると信じて。

課せられた課題

—十代に問う—

「関東で大規模な地震が起きたときに、東北への復興支援はどうなるのか」

もし今この瞬間に関東で大規模な地震が起きたら、私たちは東北を忘れずにいられるだろうか。現在多くの団体のボランティアが関東、及び関西から出発し東北への支援にあたっているが、もし関東で大規模な地震が起きたとき、そのうちどれだけのボランティアが東北を支援し続けられるだろうか。

関東からの支援は途絶え、関西からの支援は関東へ向けたものが中心となってしまうことが予想される。東日本大震災は私たちの中で風化し、忘れられてしまわうだろう。

それでは、もし関東で大規模な震災が起きた時に、今回の震災の風化を防ぎ、持続的な支援を行うために今やるべきこと、できることはなんだろうか。

TELL US YOUR THOUGHTS!
些細なことでもかまいません。
あなたの意見や考えたことを
teenfor3.11@gmail.com まで是非お送り下さい！(次号以降の冊子に掲載させていただく場合があります。ご了承下さい。)



みちのく caravan

関東、関西、九州、フランス、アメリカの

高校・大学生総勢50名からなる復興支援団体。

学生ボランティアならではの視点から、現地で見たと、感じたことを、

写真展を通じて他の学生に発信中！

様々な大学で頻りに開かれる写真展、来場者数はなんと一万人以上！

是非足を運んで、東北の「今」をご覧ください！



<http://michinoku-photo-caravan.jimdo.com/>

Youth for 3.11

2011年3月11日に設立され、学生による復興支援団体としては国内最大級。

なんと、0-8000円

の低費用で寝袋の貸し出しや、バスなどの交通手段を徹底サポート！

学生が足を運びやすく、現地の方にも喜んでいただけるプログラムを提供！



「何かしたい」「力になりたい」
そんなあなたの気持ちを
後押ししてくれるはずです！

<http://www.youthfor311.com/>

LET'S TAKE ACTION!

WHAT'S GOING ON? TAKE A PEEK!

【イベント紹介】

ごちそうふくしま満喫フェア 2012

県内外から5万人が集う年に一度の食の祭典イベント！県内各地から

大集結した料理が食べられます！福島の様々な食文化に触れてみませんか？



9月8日(土) 10:00 ~ 17:00

9月9日(日) 10:00 ~ 16:00

会場：ビッグパレットふくしま

主催：ふくしま・地域産業6次化推進協議会 共催：株式会社東邦銀行

<http://www.gochifuku.com/>

【団体紹介】

UT-aid

2011年6月より、ハードルの低い被災地ボランティアを実施することで、

被災地復興支援のFirst Stepを提供することをミッションとして活動！

今までに合計1000名以上を被災地に派遣している。

惜しくも大人気の週末派遣ボランティアは
一時休止中だが、今後は被災地のニーズに
合わせた長期派遣などの、より多彩な形で
活動を続けるUT-Aidに乞うご期待！



<http://utaid.yu-yake.com/index.html>



DON'T WORRY!

—あえて話を避ける必要はない！

東北の方と接する際多くの場合、「当時のことはあまり触れてはいけないのではないかな…」と考え、震災当時の話題をさげがち。しかし、そんな私たちをよそに、自ら当時の状況や辛かった事、悲しかった事、悔しかった事などを、懸命に話して下さる方が沢山いらっしゃる！

もちろん、当時のことを口にするのを望んでいない方もいる。こちらから無理に聞き出そうとするのは絶対NG。でも、話をして下さる方は震災を風化させないために、「いろんな人に震災を知ってほしい」と想っている。

だから、積極的に話して下さる方に出会えたら、遠慮なく様々なことを教えていただこう！そして吸収したことをどんどん周りに伝えていくことが大切。それも立派な復興支援になる！

YOU'RE NEEDED

—がっかりしないで！

実際東北を訪れ、ボランティアに参加してみると、「あまり役に立ってなかった」「まだまだやらなくてはならないことが多すぎる」、と感じ、打ちのめされる人が大多数。一生懸命現地での作業を手伝っても分かりやすい成果もなく、「復興」というあまりにも大きすぎる壁をつきつけられたら呆然とするしかない。「ボランティア」というと、すごく大きなことをするように感じるけれど、私たちにできることは本当に「些細なこと」である。

でも、だからって私たちには何も変えられないわけじゃない！

「些細なこと」の積み重ねが「復興」という大きな壁を乗り越えるためには必要。「ボランティア」というとても小さなものが、たくさんたくさん集まってやがて大きなパワーになる。私たちの小さな活動の積み重ねが、東北の「復興」を成し遂げるには必要不可欠！

なにもできないなんて思わないで！



現地での経験を最高のものにするために。
そして、あなた自身のために。

WHAT'S GOING ON

—現地はどんな状況？

ボランティアに行くとき、何を考えていく？

「私は土からガラスの破片を抽出しに行くんだ！」と思って行くのと、「この土地は元々稲作が盛んで、その産業が復旧することが今の一番のニーズ。だからこそ今私はこの土地から、津波によって運ばれた危ないガラスの破片や石を全て取り除き、農地に戻す手伝いをする必要がある！」と思って行くのでは、大違い。

その土地の名前はもちろん、土地柄や大まかな歴史、また、日々変化している復興状況を少し自分で調べてみる。そうすれば、今その土地で必要としているものが見えてくるのではないのでしょうか。事前準備をしっかりと、自分が現地で手伝う時間を濃密なものにしよう！

これからいく、みなさんへ
これだけはおきたい



東北さいこう！ 一つくこと、読むことー

「東北さいこう！」を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

みなさんにとってこの冊子は、震災への知識や理解を深める助けとなったでしょうか。

10代には多くの制限があり、

東北に行ったり、ボランティアをしたりするのは難しい人が多いのが現状です。

この冊子を読んで、震災について

知ること、考えること、そして自分の歩幅にあわせた行動をとること——

これらはたとえ小さくても確かな“支援”の形です。

「何もできない」と肩を落とすのではなく、

私たち10代にできること、10代のうちにしかできないことから始めてみてください。

この冊子を読んだことをきっかけに、

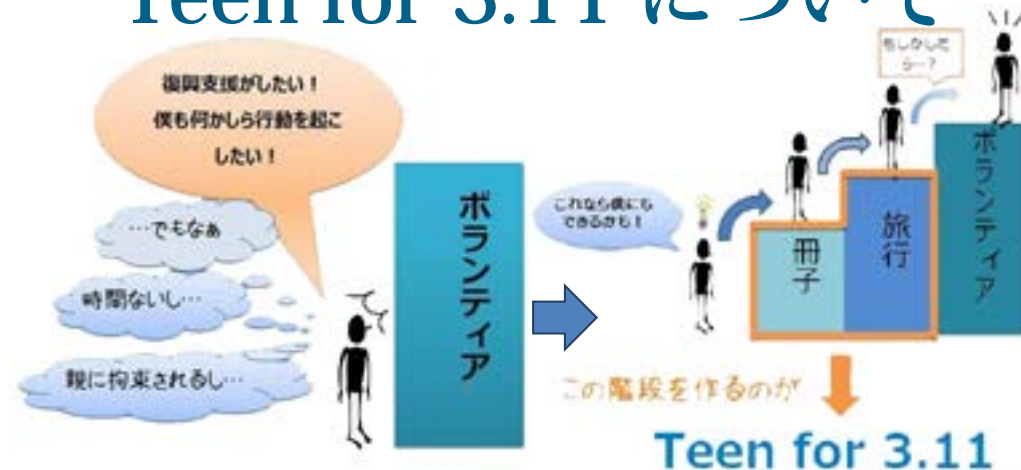
みなさんが少しでも東北のことを思い、何かしようと立ち上がったとき、

私たちの冊子を作るという努力も“支援”に変わります。

たくさんの“支援”がうまれることを願います。

小野間瑞季

Teen for 3.11 について



Teen for 3.11 は

10代のみによって組織された
復興支援団体です。

「震災って難しい・・・」「10代にもできることってあるの・・・？」

私たちは、同年代だからこそ分かるその気持ちに、10代に寄り添った形でアプローチしていきたいと考えています。

FIRST STEP

冊子

被災地について「考えること」のきっかけをつくり10代の意識を被災地に向け、自分と震災が決して無関係ではないということを感じてもらおうことを目的とします。

SECOND STEP

旅行

ボランティアをしに被災地に行くのではなく、被災地を「見ること」に重点を置き、10代に被災地の現状を肌で感じてもらうことを目的とします。

このように段階的に復興支援に関わることにより、10代に根付いた「復興支援は難しい」という概念を覆すこと、つまり、10代の復興支援に対するハードルを下げることを私たちは目指しています。そして、この活動が多くの10代の復興支援に対する意識の向上と積極的な参加につながることを期待しています。

制作

【Teen for 3.11 冊子班】

内山大志	p.9
小野間 瑞季	p.24
笠原 千秋	p.13~16
高橋 弦	p.7,8,17,18,23
寺脇 友紀	p.19~22
宮田 ひかり	p.10
山本 哲矢	p.4

写真提供

楠 正宏様

輿 将央様

清水 和奏様

表紙一部協力

前島 歩乃果様

ページデザイン

笠原 千秋 p.13~16

寺脇 友紀 p.1~12, 17~24

ご意見・ご感想等は
teenfor3.11@gmail.com まで
よろしくお願ひします。

「東北さいこう！」第1号 2012年8月27日発行

発行者 小野間 瑞季 発行 Teen for 3.11

団体責任者 塚田 權太

<http://www.facebook.com/TeenFor311>

Twitter : @teenfor_311

HP : <http://teenfor-311.jimdo.com>



【Facebook】



【Twitter】



【HP】

Teen
for
3.11